

# 女たちの明治維新

第四回

## 大久保満寿子

画: chinatsu

文: 東川 隆太郎

鹿児島市生まれ。NPO法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会代表理事。地域資源、鹿児島県内の歴史を機軸とした、鹿児島・九州の魅力を観光・教育・まちづくりに展開させる活動に従事。



### 出世する夫にかわり 家に気を配っていた妻

大久保利通が育った家庭は女性が多く、母と三人の妹がいて、男の兄弟はなかった。ゆえに、利通が二十歳の年に、父利世がお家騒動「お遊羅騒動（高崎崩れ）」で流罪となると、利通以外は女性だけになり、自身も蟄居処分となつて下級武士だった大久保家は困窮する。

こうした事情もあつて利通はなかなか結婚できなかったが、その後、父も利通も赦免され、職に復帰することになり、安政四（一八五七）年、二十八歳のときに妻・満寿子を迎える。この満寿子に関しては史料に乏しく、ふたりの夫婦生活やエピソードについては想像に頼る部分も多いが、結婚してから数年後、利通は島津久光の下で頭角を現すようになり、文久三（一八六二）年には御側役（※1）という側近にまで登りつめた。利通は身の回りの

事に細かく、喘息や胃病を持病に持ち、食べ物やたばこにもこだわる人であったから、満寿子はさぞ気を遣つたことだろう。利通が出世するに従つて家のことは満寿子に任せきりになつていったであろうし、家には利通の父母もおり、また利通は父と自分の蟄居中に苦勞をかけた妹たちをととても大切に扱つていたので、満寿子は日頃から家族に対する気配りを必要とされていたと思われる。

### 東京で活躍する夫を 鹿児島で見守る生活

明治維新後は、利通は東京を拠点とするようになる。東京時代の利通のそばにはおゆうという女性がおりました。利通との間に三人の子供をもうけた。おゆうは京都祇園の出身とされ、鳥羽・伏見の戦いにおいて薩摩と長州の軍勢の威光を高めた「錦の御旗（※2）」の生地を調達した人物ともされている。

（※1）家老につぐ役職

（※2）朝廷の軍（官軍）であることを示す旗。

満寿子は東京の夫を案じながら鹿児島で子どもたちを守り育てる生活だった。



## 大久保満寿子 略歴



生年不明

▶安政4年(1857)  
大久保利通と結婚。

.....  
▶明治7年(1874)  
上京し利通と暮らし始める。

.....  
▶明治11年(1878)  
利通暗殺の7カ月後に死去。  
東京・青山墓地に埋葬される。

## 夫の後を追うような最期

一方、満寿子は、明治になってもすぐには上京せず、六人の子どものうち年長の子を東京に送り出し、小さい子らを鹿児島で育てていた。明治六(一八七三)年に政府内での政変があり、夫と対立した西郷隆盛やその賛同者が鹿児島に帰ってくるなか、夫のいない家で小さい子らと過ごす満寿子の心中はどのようなものであっただろうか。

満寿子は明治七(一八七四)年に上京する。近代日本の建設に邁進する夫は相変わらず多忙であったが、一緒に暮らせるようになった。利通は子供煩悩で、出勤前のわずな時間に子供を抱き上げてかわいがつ

たり、自宅の書齋で遊んだりしていたことが、息子の牧野伸顕(※3)によつて語られている。しかし、明治十一(一八七八)年に利通は東京の紀尾井坂で暗殺されてしまう。満寿子は利通が亡くなる前から不調だったともいわれるが、夫の急死に耐えられなかったのか約七カ月後に後を追うように亡くなっている。

利通は金銭に潔白で、死後には国の事業のために作った借金が残っていたほどこで、暮らしぶりもそう贅沢なものではなかったであろう。加治屋町の下級武士の家に嫁いだはずが、夫は国の中心でリーダーシップを執るまでになり、満寿子は常に夫のかわりに家や子供を守る務めを負っていた。明治維新の激変を身を以て感じながら、自身は変わらずに自らの役割を守り続けた女性であった。

(※3) 利通と満寿子の子で、牧野家の養子となった。